

『NEWデリバリー通信』 Vol18

先月末 うちのちびっ子が卒園式を迎えました。保育園に入るときはトイレは大丈夫かな？ちゃんとお昼ご飯わがまま言わずに食べるかな？などと心配していたのが、つい先日のように思えるのですが あっというまに卒園。早すぎ(-_-;)。今度は小学校の一年生！今度の心配事は いじめ？登校拒否？などと考えてしまう親ばかな わたしです…(-_-;)。

発行元：大町デリバリーサービス松尾新聞店

発行枚数：2600部

発行日：不定期 宅配されています信濃毎日新聞・朝日新聞・毎日新聞・産経新聞といっしょにお届けしております。ご意見ご感想お待ちしております！

大町巡拝の旅 『仁科三十三番札所めぐり ⑥』

第6回目となりました『仁科三十三番札所めぐり』、今回は十八番札所の霊松寺と九番札所の東陽院と十番札所の三川堂の三カ所の紹介になります。

<十八番札所 霊松寺>

『山高み 松吹く風も この寺の みのりの声の よそにやはきく 』

丹頂嶺功德林大洞山霊松寺は応永11年（1404）、曹洞宗=禅宗=としては最初に信濃国で開かれた寺院。實峰良秀禅師（じっぽうりょうしゅうぜんじ）による開山、当時この地方（仁科郷）



を治めていた仁科盛忠公（にしなもりただこう）の開基とされる。

實峰良秀禅師は、曹洞宗を開いた道元禅師（どうげんぜんじ）の教えを受け継ぐ、峨山禅師（がさんぜんじ）の最も優秀な5人の弟子（五哲=太源宗真・通幻寂霊・無端祖環・大徹宗令・実峰良秀の5人の弟子を「五哲」と称している）の一人。五哲の僧侶たちは、瑩山禅師（けいさんぜんじ）が開いた総持寺から布教の輪を広げ、全国に拠点となる36の寺院を建立した。さらには、五哲の後継者が順番に総持寺の住職をつとめ（五院輪番制）、霊松寺からは、明治初年に輪番制が廃止されるまでに10人の住職が総持寺の住職をつとめた。

以上のことから「大本山総持寺御直末 三十六門中 元輪番地」と称し、更には「信濃国初開の道場」と総持寺史に記されている。弘化4年（1847）3月24日の善光寺地震により全伽藍が倒壊炎上。嘉永年間に庫裡再建するが更に霊松寺30世・安達達淳和尚（あだちたつじゅんおしょう）により再興の途中、明治元年（1868）に「神仏分離令」が、同3年に「廃仏毀釈令」が發布されたのに伴い、松本藩主・戸田光則は廃仏運動を激しく行い、松本平から

寺院をことごとく取り潰した。廃仏の波は大町へも押し寄せたが、安達達淳和尚は反発・抵抗し、決して屈服しなかった。岩崎八百之丞との「地獄極楽問答」は有名だ。その後、達淳和尚は松本藩の厳しい目を逃れ、夜陰に乗じて寺を抜け出し松代藩へ出て、日原（信州新町）常光寺、筑北村碩水寺に滞在して旅支度を整え、上京して、太政官に廃仏毀釈令の非を訴え、遂には撤廃させることができた。その後は松本・安曇平の寺院復興に奔走し、多大な功績を上げた。明治11年（1878）、廃寺となった松川村観勝院山門（嘉永5年=1852=建立・長野県宝）を移築、

本堂は明治16年（1883）に再建された。本尊は釈迦三尊（釈迦如来・普賢菩薩・文殊菩薩）。

<霊松寺の鐘(恋人達の鐘)> 開山600年を記念し、2004年に再建された鐘楼と釣鐘は、世界平和を願います。「恋人たちの鐘」（詳細は下部掲載）とも言われます。寺院の鐘は戦争中供出され、弾薬や兵器にされたことから、二度とそうした事がないように一と願い、訪れた人は誰でも突くことが出来ます。鐘を突いて平和を願って下さい。この鐘は長野県で最大とされ、広島



の「平和の鐘」を鑄造した、富山県高岡市の老子(おいこ)製作所で作られました。※先ず合掌して一礼し、突いたら1分間ほどの余韻を楽しみましょう。余韻が終わったら再び合掌して一礼してください。参考資料『ホームページ霊松寺』より

<九番札所 東陽院>

『身をわくる のりの光を それと見よ 秋の野口の 八千草の露 』

大町市平・野口中村の県道槍ヶ岳線沿い、元大北農協野口支所のあった場所にあったが、廃寺となり現在は駐車場になっている。大沢寺の末寺で初日山東陽院と呼ばれた。仏像などは野口・大出の大姥堂=十番札所=に保存されている。

当初東陽院があった場所とされる野口下村の野口神社西に新しい9番札所が建てられている

<十番札所 三川堂>（西正院・大姥堂）

『身のはての 渡りゆくてふ 三つ瀬川 名を聞くさえも そでは濡れけり 』



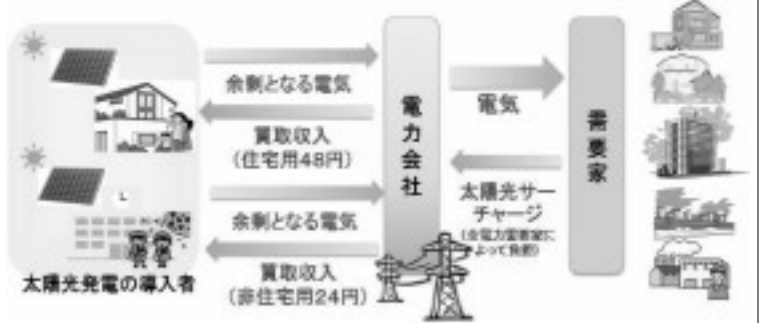
大町市平・野口の救護施設「れんげ荘」西方、市民浴場や劇団四季演劇資料館、上原遺跡（平・上原）方面への市道沿いにある。本尊は大姥尊。大姥尊信仰は越中富山で盛ん。この本尊は、富山城主／佐々成政が天正12年（1584）に、駿河の徳川家康の助けを得るため、秘密裡に冬の立山を越えたさい、道中の安全を願い富山から背負ってきたものと伝えられる。箆川・鹿島川・高瀬川の合流点に近く、三川堂と呼ばれる。右側写真は大姥尊像。





『太陽光発電の買い取り制度』地球温暖化対策の一環として、太陽光発電の普及を推し進めるため、政府は2009年11月に余剰電力の新たな買い取り制度をスタートさせました。買い取り価格はこれまでの2倍程度に引き上げられ、一般住宅（10キロワット未満）の場合は1キロワット時当たり48円、それ以外は24円（自家発電設備など併用の場合はそれぞれ39円、20円）に。この価格は年度ごとに低減の方向で見直される予定ですが、買い取り開始から10年間は固定されることになっています。電力の使い方にもよりますが、一般的な家庭なら太陽光発電の導入によって電気料金が年間で18万円ほど節約

可能です。太陽光発電システム導入の平均費用は、2007年度の数字で1キロワット当たり70万円弱。一般家庭が標準的な3.5キロワット相当のシステムを導入する場合には200万円程度の初期投資が必要で、その回収には15～20年かかるといわれてきました。しかし、国や自治体がさまざまな補助金制度をスタートさせたことに加え、新制度によって10～15年で初期投資が回収できるようになると試算されています。



<いつもどこかで「赤トンボ好きですか？」>

「庭にお齒黒トンボ（ハグロトンボ）がきましての！黒い羽をはららせて！」2009年7月、読者からの電話がうれしかった。山形・鶴岡市内ではその前年夏、中心部を流れる内川でハグロトンボが見つかり「半世紀ぶりの復活」と騒がれた。内川には藻が多く、藻刈り船が風物詩にもなっていたが、ハグロトンボが藻に産卵すると知るや市当局は藻刈りを中止した。富塚陽一市長（当時）がトンボを守るよう指示したからだ。1年後、果たしてハグロトンボは大発生し、親切な読者が知らせてくれたのだ。赤トンボといえば、東日本ではアキアカネが代表格だが、九州ではウスバキトンボだという。東南アジアや沖縄で越冬するウスバキトンボは4月になると九州に飛来し、田植えが始まった田んぼに産卵する。約5日で幼虫が生まれ、ひと月もすると成虫に。秋まで九州に残るウスバキトンボもいるが、多くが移動を始める。長時間飛行が可能だから、近畿や東海、関東方面へ北上する。田んぼや水たまりに産卵を繰り返しながら、北海道の北の端まで到着するのさえいるらしい。アキアカネなど赤とんぼの多くが田んぼで産卵する。日本人はお米を食べることで、実は赤とんぼも育てていたのだ。NPO法人「農と自然の研究所」（宇根豊代代表理事）によると、茶わん3杯分のご飯で赤とんぼ1匹を育てた計算になるという。外国産に比べて値段がどんなに高くても。赤トンボ付きと知った以上、私は断固、国産米にこだわりたい。

<美しい日本語 男と女の差>

同窓会こそタイムトンネルではないか。小学校や中学校時代から数十年たっても、顔を見ればお互いを思い出し話に花が咲く。ただ、「女子」から「〇〇くん」と呼ばれるのはなぜだろう。男子はお互いを「松澤」「伊藤」と呼び捨てで、女子を「中村さん」「奥原さん」と「さん付け」なのに。女性は、君付けが当たり前だと言わんばかりだ。男同士で君を付けるのは、同輩より目下のものが多いせいで、君付けされると見下されたように感じてしまうのだと思う。日本語には、男言葉と女言葉がある。「おい、行くぞ」は男で、女なら「さあ、行きますよ」か。外国人の日本語学習者にとってこの使い分けが難しいらしい。日本語教師の大ベテランの佐々木瑞枝さんが書いた「日本語ジェンダー辞典」には、言葉の背後に潜む日本社会の男と女の違い、社会的・文化的性差（ジェンダー）が出ていて面白い。例えば「あぐら」は男の座り方で女性は「横座り」だ。昔の正式な座り方は男も女もあぐらで、その証拠に仏像はあぐらだ。あぐらは「胡坐」とも書いて貴族が使った腰掛けを指し、十二単の女性は胡坐に座っていたから優雅に歌を詠めたというのだ。毎日何気なく使っている日本語を見つめてみませんか。新聞記者・清水 弟

新聞に載らない内緒話！

200万人への挨拶

3月5日に「第33回日本アカデミー賞」授賞式が行われた。昨年11月10日に死去した森繁久彌さん（享年96）が協会栄誉賞に選ばれた。没後、国民栄誉賞を受章をするなどその功績を讃える動きが相次いだ。この協会栄誉賞がおそらく、最後の賞だと思われる。

俳優として、もちろん超一流であったが、文筆も達者で、数々の名著を残している。気の利いたセリフで、ホロリと泣かせるのが巧かった。

森繁さんがある時、母校で講演を行った。

「諸君、死ぬ前に一つたのみがある」と切り出したから、会場はシーンと静まりかえった。その要旨を、彼が残した文章から拾ってみたい。

「かりに諸君を十五歳としよう。母親が君を受胎して産み落とし、幼稚園から小学校、中学に入れて十五年、それまでの間に一体どれくらいの間が君一人のために動員されておるか知っているか。先ず君たちの両親兄弟に始まって、助産婦、看護婦さんたち。それから、米、麦、ミルクなど船で運んできた船長。貝殻を浜で拾ってきた者、それを丸く切って穴をあけボタンに作った人。そして勿論君の友達、君を教えた先生、こうして言いだせばきりがなが、推定二百万人の人がたった一人の君のために何等かの力を寄せてくれたおかげで、十五歳を迎えることができたのだ」。

「いや、それはその人の仕事でしょう、それで金子（きんず）を払って購（あがな）ただけだ、と短絡していいだろうか。私は何がしたいのか。つまり二百万人の人に何らかの感謝の挨拶をしてからでないと、勝手に命を絶つことは許されんのだ。それがキチンと出来たら、どうぞ首でもつつて勝手に死んでくれ、それこそ自由だ」。

1月の終わりであったか、警察庁の発表によると2009年度の自殺者数は全国で3万2573人で、一昨年度より504人（1.6%）増加したという。これで自殺者数が3万人を越えるのは12年連続になる。もっとも、発表された数字はあくまで遺体が見つかった数で、実際の自殺者数はこれを上回ることは容易に推察できる。

なるほど、森繁さんの言葉をかみしめる時、人は一人では生きていないようである。まさか、とは思いが死に神の誘惑に駆られたとき、命綱となりえる言葉である。

（有）大町デリバリーサービス松尾新聞店

大町市大町2675-7（ハローワーク大町すぐ近く！）

電話：フリーダイヤル 0120-030553

FAX 0261-22-8402

HPアドレス : <http://shimbun.web.fc2.com/>

